

≫ 文法の曖昧さを理解して確実性と再利用性を高める

マイコンC言語 転ばぬ先のつえ

第20回 静的変数領域の削減③…静的変数のコンパイル結果を見てみる

鹿取 祐二

表1 C言語の変数の分類…静的変数と動変数(再掲)

局所変数と大域変数とは異なり、記憶クラスと密接に関わっている

宣言場所 記憶クラス	局所変数 (関数、複文の先頭)	大域変数 (関数外部)
なし	動変数①	静的変数②
auto	動変数⑤	文法違反
static	静的変数③	静的変数④
register	動変数⑥	文法違反

リスト1 静的変数を記述したプログラム

```
int a;
int b=1;

static int m;
static int n=2;

void func(void)
{
    static int x;
    static int y=3;
}
```

(a) ソースコード

本連載では、C言語の言語仕様(文法)の曖昧な部分と、それにより起こる問題を解説します。再利用性と効率が高く、安全かつ安心して使えるソフトウェアが開発できるようになることを目指します。

本誌2022年12月号から、静的変数領域の削減について紹介しています。「静的変数」の一言で、どの変数であるかが理解できていればよいのですが、宣言場所や記憶クラスも絡んでおり、多少複雑です。そこで、今後数回にわたり、静的変数の文法的な説明も含めて、その削減方法を紹介します。(編集部)

```
シンボル名
PUBLIC _a
PUBLIC _b
SECTION .bss,BSS
_a:
.DS (2)
_m@1:
.DS (2)
_x@3@func:
.DS (2)
SECTION .data,DATA
_b:
.DB2 0x0001
_n@2:
.DB2 0x0002
_y@4@func:
.DB2 0x0003
```

(b) RL78の場合のコンパイル結果

32 初期値の有無で変わる 静的変数の取り扱い

今回は、静的変数の領域削減の予備知識として、静的変数のコンパイル結果について解説します。静的変数のコンパイル結果はCPUの実行命令ではなく、アセンブラ制御命令です。従って、コンパイル結果(制御命令)の表記はCPUや処理系によって異なりますが、やっていることは同じです。ただし、初期値の有無で制御命令が変わります。

```
シンボル名
.glb _a
.glb _b
SECTION B,DATA,ALIGN=4
_a:
.blkl 1
_m:
.blkl 1
_x$1:
.blkl 1
SECTION D,ROMDATA,ALIGN=4
_b:
.lword 00000001H
_n:
.lword 00000002H
_y$2:
.lword 00000003H
```

(c) RXの場合のコンパイル結果

今回は静的変数のコンパイル結果の特徴を、RL78とRX(ルネサス エレクトロニクス)を例に紹介し、静的変数の初期値の有無で異なる取り扱いが必要なことを説明します。細かい点まで覚える必要はありませんから、その特徴を把握してください。

異なる処理系でもやってることは同じ

第18回, 第19回(本誌2022年12月号, 2023年1月)

号)から引き続き、C言語の変数の分類を表1に示します。

● RL78の場合

表1の②, ③, ④の静的変数を記述したプログラムをリスト1(a)に示し、これをRL78でコンパイルした結果をリスト1(b)に示します。

▶特徴1…シンボル名は変数名が基本

リスト1(b)で、シンボル `_a` が変数 `a`, `_m@1` が変数 `m`, `_x@3@func` が変数 `x` を表します。また、`_b`